

# 地域の特徴を活用したアートとデザインの観光での応用について

中野 良寿・池内麻依子<sup>\*1</sup>・福田 隆眞

Art and Design that are utilizing local characteristics apply in tourism

NAKANO Yoshihisa, IKEUCHI Maiko<sup>\*1</sup>, FUKUDA Takamasa  
(Received January 5, 2017)

キーワード：フィンランド北部、地域の特徴の活用、アートとデザイン、観光、サービスデザイン

## はじめに

最近の日本では地域の過疎化、そして高齢化が問題になっている。資本主義経済により地域よりも都会に出て仕事を見つけることが若い世代にとって魅力的であり、政治・文化など都会に全てが一極集中したようなシステムができています。若者の都会への流出によって、地域の高齢化が進み、消費する人も減るため地域経済が落ち込む現象が起こっている。このような現象は日本だけでなく、世界各地の都会から離れた場所でも同じである。フィンランドにおいても同じような状況を見ることができ、地方ではそれに対してどのように地域を活性化するかについて真剣に取り組んでいる。フィンランドの特に北部のラップランド地方では、その取り組みの一端としてアート&デザインと観光業とを融合させ、さらに様々な人々、専門家や学生そして一般の人々が参加し、ランドマークとなるものごと（施設、空間、イベント、アート作品など）を作り出す研究が行われている。

## 1. アートとデザイン、地域の特徴を利用した社会の活性化について

特にフィンランド北部ラップランド地方のロバニエミにあるラップランド大学では、大学と企業、社会が結びつき、観光業とアート&デザインを融合させ、新しい価値やサービスを作り出すことに力を注いでいる。特にラップランド大学大学院北極圏のアートとデザインコースの学習の一環で、大学周辺地域の施設をアートやデザインを利用して更に魅力的にする取り組みを行っている。筆者のひとり池内はキッティラにあるトントラという宿泊施設で自然を活用した作品を作るプロジェクトに参加している。後ほど、成功例として取り上げる。

フィンランドの大学は社会との繋がりが強く、授業の一環で、会社や学校のためにプロジェクトを行うなど、大学の外的世界との結びつきが強い。大学や学生にとっては、実践的な課題を行うことで経験を積むことができることはメリットであり、社会について興味を持つきっかけにもなる。企業としては、大学と繋がることで、教育の場を提供する形でも社会貢献を果たせるため、企業イメージも良くすることができ、コストも削減できる。

### 1-1 具体的なアートとデザインの社会の中での活用方法

フィンランド、特にラップランド地方で実践されている具体的な方法については、“サービスデザイン”と“応用された視覚芸術”を活用し、“地域の魅力に新しい価値を加える”ことである。

“サービスデザイン”の利用によって、観光客・訪問者の滞在体験、システムやビジネスのサービスを改善でき、魅力的にしている。サービスデザインについては後述する。

そして、“応用された視覚芸術”の利用については、地域の自然や環境等を活用したアートの制作を指し

\*1 The University of Lapland, Master's degree program, Arctic Art and Design

ており、具体的にはインタラクティブアート（人を巻き込み相互に作用するアート）、エンバイロメンタルアート（自然環境を利用したアート）、コミュニティアート（コミュニティのためのアート）のことである。

アートとデザインを利用して魅力的な体験を提供するには、環境的な特徴の利用＝北極圏、民族学的特徴の利用＝サンタクロース、エルフ（サンタクロースの手伝いをする小人、以下、小人と表記する）などのイメージコンセプトを大切にし、その場所でしかできない特別な経験を新しい価値として作り出すことである。実際には、北極圏の寒い環境や自然素材を利用し、氷や雪を使った彫刻、氷でできたホテルやバー、レストランなどが作られている。また、地域のおとぎ話から連想する小人やサンタクロースをイメージした宿泊観光施設なども存在している。

魅力的で人を惹きつけるものをアートとデザインを用いて作り出すことで、それを見るために観光客が増え、その地域に来る人が増える。そうすると人々にとってのその地域に対する魅力や価値が高まり、経済にも影響を与える。更に、訪問者が増えると、彼らをもてなすために人を雇う必要が出てくる。そうすると、仕事を求めて新しくやってくる人も増え、若者も増える。そして地域の若者が都会に流出する数を減らすことにも繋がる。

## 2. フィンランド、ラップランド地方での成功例トントラについて

フィンランドの地域の特徴をコンセプトとして発展させ、観光業とアートを融合させることで訪問者を呼び込む事に成功している例として、トントラ、小人の隠れ場所（Tonttula, Elves Hideaway）が挙げられる。

トントラとは、フィンランド北部ラップランド地方のキッティラの自治体に存在しており、その地域に昔から伝わるエルフ（フィンランド語ではトント）の隠れ場所をテーマに自然と文化をコンセプトとして作られた宿泊観光施設である。冬季には観光客が1日600～800人程訪れる程、人気の観光地となっている。

### 2-1 フィンランド、ラップランド地方のキッティラについて

トントラの位置するキッティラは、人口およそ6500人の地方自治体である。都合のよいロケーションと、多彩なサービス、仕事の繋がりと素晴らしい周囲の自然環境のおかげで、住人、観光客そして企業に良い環境を提供している。風景は幾つかの素晴らしい丘と大地、地方自治体を流れるオウナス河で形づくられている。1868年に地方自治体が出来た。そして、およそ8000年前から人類が住んでいたことも証明されている。地域面積はおよそ8300km<sup>2</sup>。718個の湖、10個の丘が存在し、12000頭のトナカイがいる。

森があり、夏にはブルーベリーなどのベリーピッキング、キノコ狩り、ハイキングなどが盛んに行われる。ナーバという植物が木に寄生しており、その植物が存在することがその森の空気の美しさを表している。夏は白夜で太陽が一日中沈まない日がある。

冬は雪が11月頃から降り、次の年の5月頃まで平均して積もっている。冬は、スキー、スケートなどのウィンターアクティビティと、オーロラや雪景色の美しさなどを目的に観光客が集まる。ハイキングの途中では、焚き火の周りでソーセージを焼いたりすることも一年を通して行われている。

280kmもあるオウナス河が、キッティラ地方にも流れており、地域の住人の食生活を支えている。サーモンなどもかつては沢山捕れたようである。

1600年頃、南部に住んでいたフィンランドの人々が先住民のサーミの人々を北に追いやり、移り住み始めた。そして、フィンランドの林業の発達に伴い、環境と河を汚染することになるが、その環境の状況も改善されてきている。

キッティラ地方には、フォレストサーミというサーミ民族が住んでいた。サーミ民族はラップランド地方に住んでおり、フィンランドだけではなく、スウェーデン、ノルウェー、ロシア各国の北部に存在している。彼らは戦争の際、フィンランドの中部に移動したりした。また国境が決められる際に、当時の支配国となったスウェーデン、ロシアの影響を受けることとなる。そして地形的な理由など（河が存在していることなど）から彼らの活動領域とは関係なく、国境を決められ分断された。そのため、北欧とロシアの国々にそれぞれサーミ民族が存在することになる。

キッティラは位置的に、スウェーデンやノルウェーと近いため、人の移動が盛んであった。そのため、様々な文化が交わる場所となっていた。



## 2-2 大学と共同で行われるプロジェクト

トントラのオーナーの依頼により、ラップランド大学の学生と共同でプロジェクトが行われている。敷地内の建物同士を結びつける通路であるトンネルのデザインと、雪と氷を利用したパブリックアートの作成、ランドスケープのデザインを作ることが決定している。筆者の池内もそのプロジェクトのメンバーの一員であり、主に担当するのは、雪と氷のパブリックアートの作成と敷地内のランドスケープデザインである。特に、ラップランド、キッティラの冬は3つに分けられるため、それらの季節に適したデザインを行う必要がある。1つ目の季節はクリスマスシーズン（11月中旬～12月末）であり、沢山の人々が訪れる。親子連れも多いため、雪や氷を利用して遊べる空間が求められている。2つ目は、北極圏の季節（1月～2月の中旬）であり、フィンランド以外からも多くの観光客が厳しい寒さと美しい自然を体験しに来る。その際に雪と氷のアート作品を展示することになっている。最後はスキーとフィッシングの季節（2月中旬～3月末）であり、主にフィンランド人が訪れる。

これらの3つの季節に適したパブリックアートとランドスケープをそれぞれデザインする。トントラのコンセプトである、小人とラップランド地方の豊かな自然と文化を最大限活用したデザインをすることが求められている。特に、訪れた人のその場所での経験を豊かで素晴らしいものにするためには、人々の感情を一番重要な要素としてデザインを進めていく必要がある、サービスデザインの考え方を活用してプロジェクトを進めていく。人々の感情に訴えるためにも、自然の美しさの活用と人と人とが関わり合う環境や空間をデザインすることが大切である。このプロジェクトは始まったところであり、現在既に2度の現地視察が行われ、文献による情報調べとアイデアの構想を練っている段階である。

このプロジェクトでは、フィンランドのアーティスト（建築家、木彫作家などの4人）と宿泊施設のマネージャー、サービスデザインや美術教育などの学生、また宿泊に来られた方にも参加してもらい、多くの異なる人々とのコラボレーションによって行われる予定である。なぜなら、それぞれの専門知識や得意分野を活かし、力を合わせて一人では作り出せないアイデアと最終作品を作り出すためである。



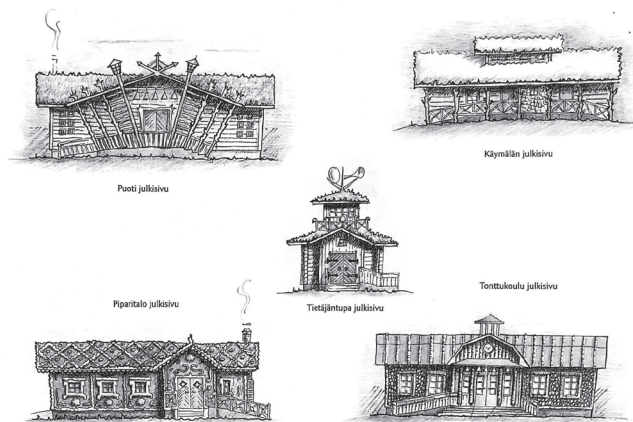
冬のトントラの様子のスケッチ



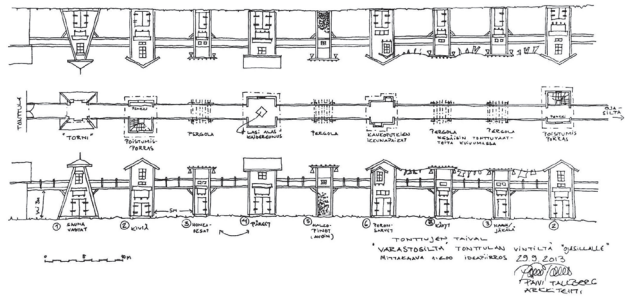
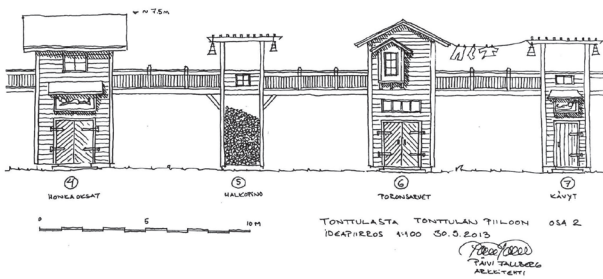
トントラの敷地内の地図



小人に扮した従業員たち



建設途中の施設の建物



建設予定の建物同士を結びつけるトンネル、プロジェクトの一環で内部をデザインする予定



敷地内の様子

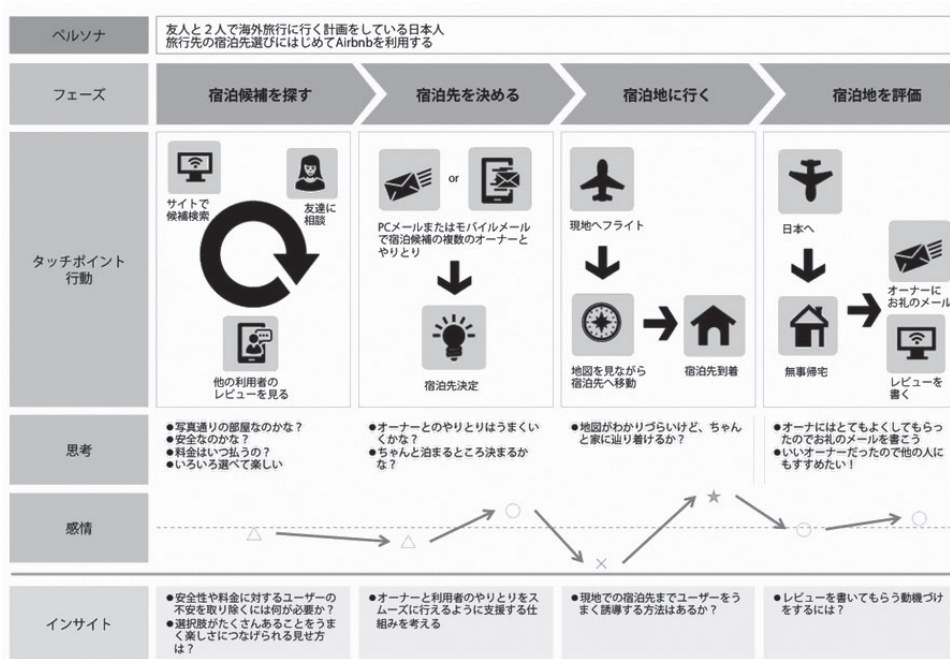


建物の中の様子

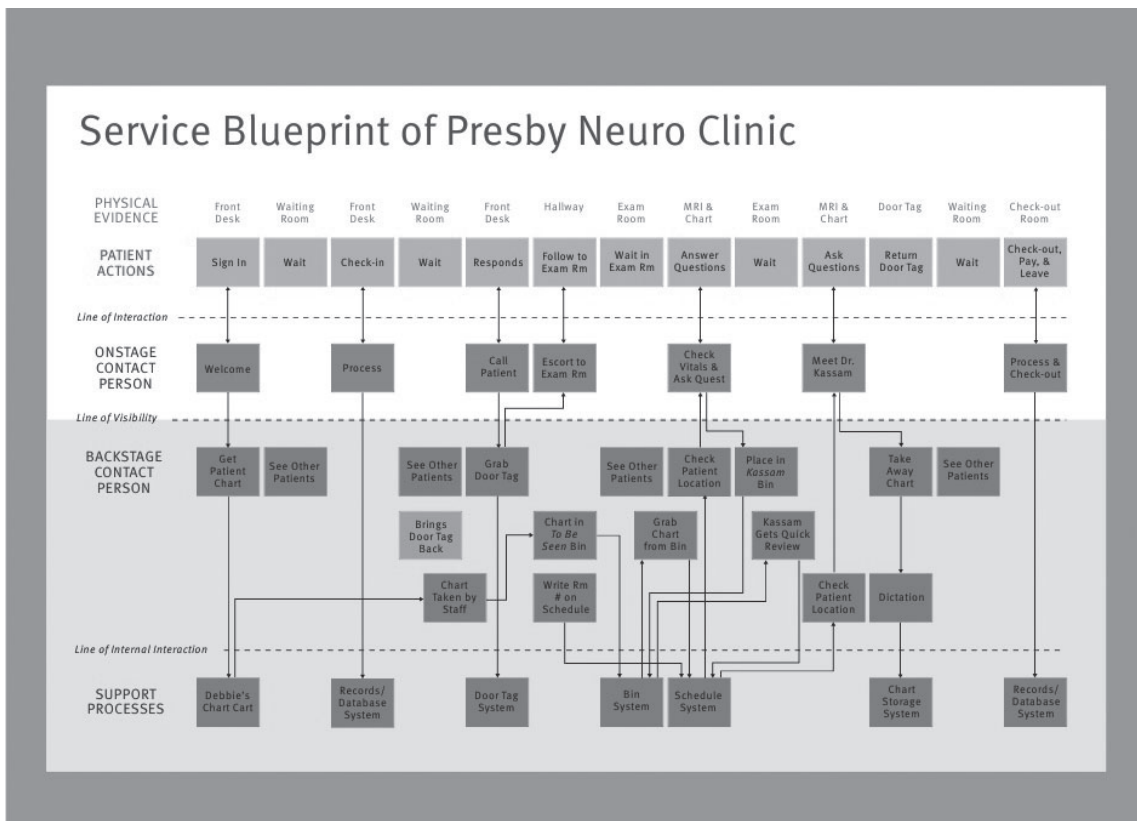
### 3. サービスデザインについて

トントラでプロジェクトを進めて行く際にデザイン、特にサービスデザインの考え方が進められている。日本では、ビジネスの分野で話題になることが多いが、フィンランドでは、学校や大学のシステム、公共広場の利用方法の改善など、形に見えないシステムや既に存在するサービスを改善する際に積極的に利用されている。

サービスデザインの基本的なデザインプロセスは、エモーショナルな価値の具現化と再現の可能性を重視して行われる。利用者の価値をベースに考えたときにどうアプローチしていくべきか、どんなタッチポイント（その行動を起こすきっかけになった部分、顧客との接点）を設計すべきかなどを全体的視点で考える。カスタマージャーニーマップ（サービス設計の際に顧客の行動文脈を旅のプロセスに見立てて可視化し、把握する手法やそのために描いた図）を作成する。より良いカスタマーエクスペリエンスを実現するために、サービスのアイデアの創造や設計のためのヒントを発見する際に使われる。顧客の思考や感情まで把握する必要があるため顧客の行動や心理についてフォーカスしている。また、サービスブループリント（全体の青写真を描くアプローチ）の作成も重要であり、検討してきたサービスのデザイン案を設計図として描くことで、全体を把握し修正する。また、現状のサービス提供の“形”を視覚化することで、いまのサービスの提供形態における問題点を“見える”ようにする目的でも利用されている。顧客行動に合わせてフロントエンド、バックエンドのスタッフやサービスシステムがどう連携して動くかを明らかにする。



カスタマージャーニーマップ 出典：http://web-tan.forum.impressrd.jp/e/2013/11/14/16305



サービスブループリント 出典：http://www.slideshare.net/jaminhegeman/upmc-neuro-clinic-service-design

フィンランドなどのヨーロッパにおいてもサービスデザインは比較的歴史が短い分野であり、日々新しく作り出されている。そして目に見えないシステムやサービスなど、利用する人々の経験や価値をデザインするため、まだ抽象的である部分が存在している。サービスデザインで大切なことは、利用者であるユーザーが積極的にデザインに参加することである。人間を中心としたデザインとは、そのサービスによって利益を得る人々（ユーザー）がデザインを行う段階でパートナーとして参加することで共に新しいものを作り出すことである。素材から精神的な要素、サービスを受けた時の感情までデザインを行う。デザインの分野は経験をベースとした共同のデザインへと変化しており、今までにない新しい価値観を作り出している。

### 3-1 北極圏におけるサービスデザイン

北極圏でのサービスデザインには沢山の目的と発展分野が含まれている。サービスデザインは北極圏地域の発展のための一つの方法として認識されており、北極圏の人々の幸せのために新しい機会と可能性を広げている。特に北部の観光業と公共のサービス部門の挑戦に答えるための一つの方法と捉えられてきている。それは新しい観光業におけるサービスの発見と発展を可能にし、そしてサービスの革新と共創のための生きている実験場所として機能している。サービスデザインの方法論とアプローチは北極圏地域の革新と競争性を増やすことに利用することができる。サービスデザインは急進的な革新のための通路であり、そして新しい解決方法と新しいサービスの導入方法を見つけることは挑戦である。革新的な方法の利用、創造性と直感、サービスデザインの思考に含まれている。北極圏での都市同士の距離は長く、まばらに人口が分布しており、自然の生存状況はとても厳しく、いくつかの場所では人口が急激に高齢化している。サービスデザインとそれによってもたらされる急進的な革新は、生き生きとした観光業の部門と地元の人々の日々の生活との間でバランスをとることができる。

### 3-2 サービスデザインと雪

Satu Miettinenは“サービスデザインの方法は雪のデザインと雪の建築商品と関係のあるサービスを発展させることを助ける。”と考えており、彼女の生徒であるArnberg (2013) はどのように人間を中心としたデザインアプローチが雪のデザインの発展を助けることになるのかについて勉強した。彼女の研究は2012～2013年の間行われたラップランドスノーデザインプロジェクトの中の一つのアクションリサーチとして行われた。彼女は地元で雪のデザインを行う起業家と一緒に、コンセプトとサービスデザインの過程で人間を中心としたデザインの方法とアプローチを応用した。特に、雪の建設物のための新しい概念を発展させるとき、デザインの方法を利用した。彼女は雪のデザインを行う際のための、ユーザー中心のアプローチ方法、デザインマネージメントとプロトタイピングの方法を提案している。これによりマテリアルデザインとより人間を中心としたデザインとの領域が繋がることになった。彼女はラップランドスノーデザインプロジェクトとの一環であった北極圏の雪の部屋をデザインした際、自身の方法を試している。また、そのデザインプロセスを分析するとき、インタビューと文献のリサーチを行った。デザインは雪の建築において3つの異なる方法の価値を加えることができると彼女は結論付けている。①サービスの発展の改善、②デザインプロセスの改善、③製品の発展のための改善である。

彼女が導いた結論は、北極圏のデザインの考えとアプローチが異なるコンセプトのデザインとプロトタイプの方法を通して、どのように、フィンランドの雪の建築の発展を容易にすることができるか、についての考えを支えている。サービスデザインとコンセプトデザインでは、どのようにサービスが提供されるか、雪のデザインの概念を支えることができるか、を具体化するかが重要である。更にまた、それはユーザーの役割と相互作用を説明し、そして提案された雪の建築を具体的に説明している。

## おわりに

フィンランドで行われている地域のオリジナリティをデザインとアートを使って発展させる方法は、日本の地方再生においても有効に応用することができると思われる。地域や地方の自然素材を利用した特産物などは日本の全国各地で見つけることができるが、地方に伝わるおとぎ話などをもとにして作られた宿泊施設などは少ない。東京ディズニーランドなどのテーマパークの様に徹底したコンセプトイメージを持ち、それに従って施設をデザインしている会社も存在するが、地域の文化との結びつきが薄い場合が多い。日本全国、それぞれの場所にちなんだ昔話やおとぎ話は沢山存在しており、それらからアイデアを見つけ出し、デザインとアートを使って発展させることで新しい観光資源としての魅力を作り出すことができると考えられる。

そのため、サービスデザインと応用された視覚芸術を地域の魅力を再構築する際に使うことは、これからの日本社会にとってもとても重要であると考えられる。

## 参考文献

Satu Mittinen & Anu Valtonen : Service Design with Theory DISCUSSIONS ON CHANGE, VALUE AND METHODS, HansaBook, Vantaa 2013

Elina Harkonen, Timo Jokela, Annti-Jussi Yliharju : Snow Design from Lapland, Initiating Cooperation, University of Lapland, Rovaniemi 2014

<http://www.kittila.fi/en/culture>

<http://www.kittila.fi/kylaesite/en/files/assets/basic-html/index.html#page2>

<http://www.lapintonttula.fi/ja/>

<http://sustoco.concentinc.jp/feature/dialogue/14/pdf/sustoco014.pdf>

## 引用文献

1) Elina Harkonen, Timo Jokela, Annti-Jussi Yliharju : Snow Design from Lapland, Initiating Cooperation, University of Lapland, Rovaniemi P.96-97, 2014.